

黒島・道下の結婚儀礼

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23892

9. 黒島・道下の結婚儀礼

種 五 加 奈

1. はじめに
2. 黒島の嫁とり
3. 道下の嫁とり
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

近年、結婚式の形態は多様化してきている。ホテルで行う人もいれば、結婚式場で行う人もいるし、ホームパーティのような形で式を行う人もいる。しかしどのような形態でも結婚式というものは一生に一度の晴れ舞台である。

結婚式というものはいつから現代のような形態、形式になってきたのであろうか。現代の結婚式と昔の結婚式はどのように違い、どのように変化してきたのであろうか。

今回私は黒島、道下の両地区で昔の結婚儀礼について調査を行った。まず初めに気づいたことは私が聞き取り調査をさせていただいた人の大部分が結婚式のことを「嫁とり」というのだ。昔は結婚式とは言わず「嫁とり」と言っていたそうだ。これにはどのような意味が込められているのだろうか。

本章では黒島、道下の各地区の昔の結婚儀礼について、その形式や各地区の特色などの詳細を報告し、「嫁とり」というものの意義、変化を考察していきたい。

2. 黒島の嫁とり

黒島の嫁とりについては詳しく結婚儀礼についてお話を伺うことができたお二人、1950年にご結婚されたSさんと1963年にご結婚されたNさんの事例を紹介する。

Sさんの事例（76歳男性・1950（昭和25）に結婚）

○ 結婚まで

Sさんは23歳のとき妹さんの同級生と結婚された。Sさんは当時、黒島では黒島の者同士の結婚が理想とされていたと言う。黒島はかつて徳川幕府の直轄地（天領）だったため、他の部落の人々より身分が高く、またプライドも高かったという。黒島以外の部落の人は身分が低いと思っていた。また結婚相手を選ぶ際もその相手の親が他の部落出身だとその家はたいしたことがないとみなされ、黒島の人々はお嫁にやるのを嫌がったという。

またSさんの頃には親同士が決める結婚以外の結婚の仕方もあったそうである。例えば高等2年生を上グループ、高等1年生を下グループとし、各グループに20人くらいが在籍して、その上のグループと下のグループが集まって40～50人くらいの集まりをつくり、飲み食いする集會を開くために個人の家を借りて集る。その家の屋号をとって、そのグループを「～（屋号）連中」と名乗った。そこでそのグループ内で結婚できない人がいると、そのグループ内で世話をすることもあったという。つまり若者が仲介役をすることもあった。

○ 嫁とり当日

<嫁ぎ先まで>

当日はお昼くらいに仲人と婿側の親族数名が花嫁を迎えに行く。そして花嫁の家で簡単な御前をいただく。その後花嫁・花婿の親族が交じって行列になり、花婿の家まで向かう。しかし花嫁の両親は参列することはなかったという。この婿の家までの行列の途中、「縄はり」が行われる。「縄はり」というのは花嫁が嫁ぎ先に向かう途中に、嫁ぎ先の家の前に何本もの縄が張られていて、その縄を解いてもらうために花嫁側の親族がご祝儀を渡すという風習である。縄をもつのは近所の人々で、ご祝儀も縄を張っていた人がもらえるそう。

また花嫁を連れた行列が嫁ぎ先に着くと、玄関先で「あわせ水」というものが行われる。あわせ水とは新婦が自分の家を出るとき、自分の家の食器で水を飲み、その食器を嫁ぎ先までもって行き、そしてまたその食器で嫁ぎ先の水を飲み、その食器を故意に落として割るという風習である。食器がきれいに割れれば縁起がいいとされ、また割れなければ割れるまで続ける。また、Sさんの時は式・披露宴で仏壇の前に座るのでその時に仏壇や神棚にも参ればよいという事で、嫁ぎ先に入る際にわざわざ仏壇・神棚参りをするという事はなかったそうである。

<式・披露宴>

式・披露宴はSさんの自宅で行われた。Sさんが結婚した頃は敗戦直後であったので、式・披露宴はとても質素なものであったそうだ。嫁入り道具も箆筒・普段着くらいだった。

夕方の4~5時頃から式が始められる。場所はその家の座敷で行われる。花嫁・花婿・親族がどこに座るかなど、席位置はそんなに決まっていなかったそうだ。この時料理は輪島塗の御膳で出される。黒島ではどの家でも、御膳は黒の御膳を使っていた。黒は黒島の身分の高さ・武士階級を象徴していて、他の地域の御膳は平民を象徴する赤いものを使用しているそうだ。

また披露宴には近所の人々がたくさん(100人くらい)見物に集まる。これらの見物人にもお酒、赤飯がふるまわれた。この時代は質素な披露宴だったそうだが、披露宴で行われる余興だけは盛大なものだったという。北前船に乗っていた船員がいろいろな地域でその土地の芸を習ってきて、披露宴の余興で披露する。余興は夜中まで延々と続けられる。

Nさん(66歳、女性、1963(昭和38)年結婚)の事例

○ 結婚まで

Nさんは黒島の出身で、同じく黒島出身の旦那さんのもとに嫁いだ。Nさんの話によると、Nさんの時代、結婚相手はほとんど親同士の相談で決められたという。仕事で黒島に来た人と恋愛結婚したという人もたまにいたそうだが、そのような場合親は猛反対そうだ。

またSさんの事例同様、黒島がかつて天領であった影響はNさんの時代にもまだ残っていたようだ。そのため他の部落の血をいれること、つまり他の部落から嫁をとることは好ましいこととはされず、やはり黒島の者同士の結婚こそが理想とされていた。他の部落から嫁をとると親が泣いたという話もあるという。またNさんは黒島の夏祭り・天領祭の盆踊りの歌にも「ほれてはならない 他国の人に 末はカラスの鳴き別れ」(天領祭之歌集より)という歌詞があったと紹介してくれた。

またごく稀に剣地・深見・道下など他の部落から嫁をとることもあったそうだが、結婚して黒島に嫁いだ人の中にはよそ者という扱いをされたり、引け目を感じる人も多かったそうである。そのように他の部落から黒島へ嫁いだ者同士の集まりが月に1回程度あり、そこで同じ境遇のもの同士がいろんな話をしたという。Nさんはこのように他の部落から嫁いだ人が引け目を感じていたなどは当時はわからず、7、8年前に人づてに聞いてようやく知ったという。

しかし今から30年まえくらい前から、黒島の者同士が結婚しなければならないという意識は薄れていき、現在ではどの地域からでも嫁を取っているそうだ。逆に黒島の者同士の結婚は滅多になくなったという。

○ 結納

Nさんの時代は結納とは言わず、結納は「酒おさめ」と言われていた。酒おさめは仲人2人が昆布、するめ、お酒を持って嫁の家へ行き、そこでお酒を飲む。だいたいそのときに嫁とりの日

取りが決められたそうだ。

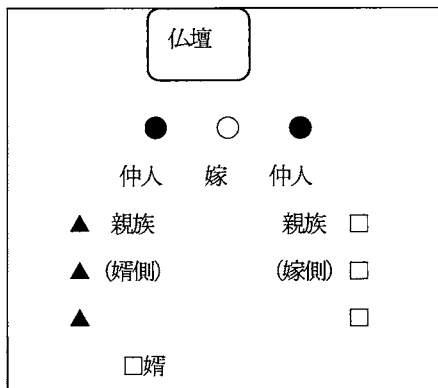
また1週間くらい前に和箆笥・洋箆笥・下駄箱などの嫁入り道具を運ぶ。これらの道具を運ぶために近所のお店からトラックを借りてきたそうである。

<式（嫁とり）と披露宴>

Nさんの時代はまだ、嫁とりは婿の家で行われることが多かった（Nさんも旦那さんの家で行った）。しかし、Nさんより6歳下の世代（昭和45年頃）になると公民館で行われるようになったという。これは個人によって徐々に華美になっていく結婚式を、皆同じ水準の結婚式にしようという生活改善運動の一環だったそうである。しかしNさんによると黒島は生活改善運動の影響はそれほど受けず、この運動が行われた当時もわりと結婚式は盛大に行われていた。その後はだんだんと金沢の式場などについて式を行うようになった。

嫁とり（結婚式）と披露宴は一緒のものとして行われたそうである。場所は花婿の家の座敷で行われた。また席位置もだいたい決まっていたそうである。仏壇をあるほうを上座として、上座には両端に仲人が座り、その仲人の間に嫁が座る。また嫁側、婿側の親族は左右に分かれて座る。婿は下座のほうに居たそうである（図1）。

図1：黒島の披露宴の座席



はじめに花嫁と花婿、両家の親族、仲人だけで「一番膳」が行われる。まず輪島塗の盃が出てくる。その盃にお酒が注がれ、まず花婿が飲み、次に花嫁に飲む。

「二番膳」には給仕していた人、お手伝いさんなども参加する。二番膳では花嫁が給仕し、あいさつをして回る。この時花婿はあいさつ回りなどはせず、友達と喋ったりしているそうである。

また結婚式の料理は花婿側の親戚や近所の人々を作る。茶碗蒸し、昆布巻き、酢ごんぼ、鯛のお頭付の焼

き物、鶏汁（鶏を骨ごと細かく潰して、鶏肉と一緒に団子にしたものが入っているおつゆ）、かすべ（かすべというのはエイを焼いてたたいたもの。北前船によって北海道から運ばれてきたそうで、「かすべ」というのは北海道での呼び名だという）などである。

結婚式で出された料理を全部食べきれない人もよくいるそうで、そのような人のために「おかえり箱」というものがあつた。おかえり箱というのは約25cm四方の木箱で、その中に食べ切れなかった料理を入れて、その人の家まで運んでいったそうである。またそのおかえり箱にはいつか料理を受け取った人は、空になったおかえり箱のなかに20円を入れて返すそうである。その

お金は持っていった人の手間賃となる。

嫁とりにはその様子を見ようと近所の人が大勢集まる。近所の人々にとって嫁とりは楽しみな行事の一つだったそうである。

披露宴では集まった近所の人々によってにぎやかに余興が行われる。黒島では必ず余興として「いしばかち」というものが行われたという。「いしばかち」とはまず座布団ひいて、その中心に棒（棒の先には松の枝が刺さっている）を立て、誰か1人がその棒を持っている。またその棒の先からはカンナで削ったような薄い木板と紐が垂らされる。その垂らされた紐を皆で持って歌に合わせて引っ張る。中心の棒を持っている人も歌に合わせて棒を上下に突く。この時の歌は、歌が上手な老女の方々によって歌われるそうである。

まず、「はじめろー」という掛け声ではじまり、以下のように続く。

いしばかち なるたいなー（※よいよいよい）

めでためでの若松様は枝も栄えて、葉も茂る（※あーよいよいよい）

今日のはうれしや 雲きり晴れて 富士も霞のおびをとく

今日のはうれしや 蝶よ花よと育てた娘

今日のはうれしや 殿をもつ

※ 掛け声。掛け声は皆で言う。

この歌詞の「枝も栄えて、葉も茂る」には「子供も出来て、家が繁栄する」、富士も霞のおびをとくの「おびをとく」には「お嫁さんの帯を解く」、「蝶よ花よと育てた娘」には「大事なものとして育てた娘」といった意味が込められているのではないかとNさんは言う。

またその他にも北前船によってもたらされた島根県の民謡・やすぎ節にあわせて踊る芸もあったそうである。このやすぎ節を踊る際に「銭太鼓」（写真1）という筒の中に銭をいれた楽器を用いる。この銭太鼓を打ち合わせたり、振って鳴らしたりして踊る。Nさんも上手に踊って見せてくれた。この銭太鼓は黒島の伝統芸能の一つで、今婦人会ではこの銭太鼓を継承していこうという動きがある。

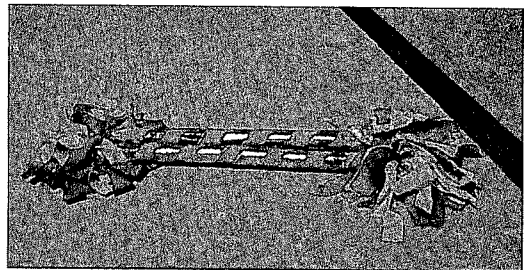


写真1： 銭太鼓

3. 道下の嫁とり

道下の嫁とりについては自宅で嫁とりを行ったKさんご夫婦（1952年御結婚）と、自宅で「公民館結婚式スタイル」での結婚式を行ったIさん（1961年御結婚）と、道下の公民館（諸岡公民館）で結婚式を行ったOさん（1971年御結婚）の事例を紹介する。

Kさん御夫婦（1952（昭和27）年結婚）の事例

○ 結婚まで

Kさん御夫婦はどちらも道下の出身で結婚は親同士の話し合いで決められた。当時は道下の者同士の結婚がほとんどで、たまにいとこ同士で結婚するといったこともあったそうである。また黒島から道下に嫁がくることはなかったという。当時、嫁とりというのは嫁が「働き手」として働くためにその家に嫁ぐという意味合いが強かった。また親が結婚相手を選ぶ際の決め手となるのが、その家に自分の娘をやっても食べていけるかということだった。当時は食料難の時代であり、そのため百姓の家は米だけは必ずあるので食べ物には困らないだろうという理由で百姓の家に嫁ぎ先を決めることも多かったそうだ。

また結婚式の時期であるが、道下の人々は百姓が多かったため百姓の仕事がある夏などには結婚式はしない。仕事がひと段落する頃である秋～春の間に式をする。

○ 酒おさめ

仲人が嫁の家に酒2升、するめ2輪、昆布を持っていく。現代の結納のようにお金はまったく使わなかったそうである。

○ 嫁とり当日

<嫁ぎ先まで>

当日は仲人と婿側の親族5~6人が花嫁を家まで迎えに行く。花嫁の家に着くとその家で花嫁・花嫁側の親族とお昼を食べる。花嫁が嫁ぎ先に行くまでは花嫁側の親族も行列に交じり花嫁を送っていく。そうように花嫁を送ってきた親族の人々には結構な額の祝儀が渡される。

またKさんご夫妻の場合は片づけが大変などといった理由で、嫁ぎ先に着いた際、玄関先で行われる「合わせ水」はしなかったそうだ。自分たちの時はしなかったが合わせ水には二度と実家の方の食器を嫁が使えないようにするため・元の家には戻らないようにといった意味があるのではないかと言う。

<式・披露宴>

式自体はだいたい3〜4時ごろ始められる。席位置は仏壇を上座とし、新郎新婦が上座の中央に座り、その両隣に仲人2人が座る。親族は新郎・新婦側で分かれて左右に座る。親族の並びは新婦を送ってきた人が上座側、その後は年長者、血の濃い順に座る。全体としてはコの字型になるように座る。

まず新郎・新婦、親族、仲人で本膳が2時間ほど行われる。本膳の中で三々九度が行われる。三々九度とは三つ組の杯を用いて新郎・新婦が3度ずつ、3回酒を飲むという風習である。雄蝶・雌蝶の男の子と女の子がお酒を持つ役、杯を持つ役は親族がしていたという。またそのあとに今度は新婦と姑で親子杯を行う。新郎は三々九度などの儀式が終わると式から居なくなってしまう。その後は皆が飲む酒のかんをしていたそうである。この際に出される料理は婿側の親戚・近所の方々で2、3日前から作り始める。にしめ、鶏汁、茶碗蒸し、刺身、紅白の落雁の鯛などが出されたという。また輪島塗の赤いおわんが使われていたそうだ。

本膳が終わると二番膳が行われる。二番膳にはたくさんの友人が参加する。二番膳ではお菓子などが出てくる。また本膳で出された鶏汁はおかわりすることができたという。

披露宴は今のように儀式的なものではなく和気あいあいと行われた。地元の民謡を歌ったり、当時の流行歌を歌う。また黒島では必ず余興として行われるいしばかちであるが、道下でも特定の家は行っていたそうだ。Kさん夫妻によると道下の人間は黒島の人間より引っ込み思案であり、恥ずかしがりなのだという。だから余興も黒島に比べるとあっさりしたものだったようだ。黒島の人間は芸達者な人が多く、皆余興が好きで競い合っていたという。道下の人間は農村の連中で田舎臭かったが、黒島の人間は船乗りが多く、他の地域との関わりも深いため、おしゃれであかぬけていてお互い競争心を持っていたそうだ。

Iさん（75歳、男性、1961（昭和36）年結婚）の事例

Iさんは自宅で「公民館結婚式スタイル」の結婚式を行ったそうだ。公民館結婚式スタイルというのはIさんがご結婚された昭和30年半ば頃、道下地域では1つの結婚式の形式として確立されたものだった。まずはじめに公民館結婚式スタイルというものがどのような経緯で確立されたのかをIさんのお話をもとに述べたいと思う。

昭和29年、市町村合併が行われ諸岡村（道下地区を含む）は門前町と合併された。それに伴ってそれまで道下地区にあった諸岡村役場も空き家となった。この頃道下には独立した公民館というものはなかったので、もとは役場があったその空き家を道下地区の公民館とし、道下にはじめての公民館「諸岡公民館」が設立された。またこの昭和30年頃、全国で生活改善運動が推進され道下でも結婚式の簡素化が図られるようになった。この運動の一環として結婚式の場所を公民館

に移して、料理・衣装・式の形式などを統一した結婚式をしようという動きがみられるようになった。この動きの背景には華美になりすぎる結婚式を質素なものに統一しようという理由のほか、自宅での結婚式は各家庭で御膳を準備しなければならないし、片付けも大変だからという理由もあった。

しかし当時の諸岡公民館というのは結婚式を行えるような広さではなく、公民館で結婚式を行うのはなかなか困難だったという。そのかわりに当時道下の農業協同組合の二階には広い部屋があったということでそこを借りて式を行うこともあったそうである。

昭和42年に諸岡公民館は改築され、2回に広いホールが設けられた。この新しい公民館ができてからは道下での結婚式は全て諸岡公民館の2階で行われたそうだ。この公民館では93回の結婚式が行われた。

しかしIさんが結婚された昭和30年代半ば頃は旧師岡公民館ができてから改築された新しい諸岡公民館ができるまでの過渡期であり、公民館では狭くてできないが、公民館でやるのと同じ形式で質素に、自宅で結婚式をあげようという動きがあった。その形式を「公民館結婚式スタイル」と呼んでいたという。

また諸岡公民館は平成に入ってから新築され、それが現在の諸岡公民館となっている。現在の公民館の2階は簡易舞台、スポットなどの設備が整っているそうだが、この公民館になってから結婚式は一度も行われなかったそうである。

次にIさんの自宅での公民館結婚式スタイルがどのようなものだったかを簡単に紹介する。当日は仲人と親族数名が新婦を家まで迎えに行き、嫁ぎ先まで行列で向かう。この時も縄はりも行われていたそうだ。嫁ぎ先に着いてからは水あわせは行わず、神仏参りだけを行った。

式・披露宴は自宅の2階の座敷で行われた。席位置などはKさん御夫妻の頃と同じコの字型であった。しかし、Iさんの結婚式には新婦の御両親、司会進行役として婦人会の方、公民館主事をやっておられた方も出席されたそうだ。

式はまず司会の方によって開会の辞が述べられ、公民館主事によるあいさつ、そして仲人のあいさつというように進められる。また三三九度、親子盃も行い、誓いの言葉を新郎新婦で読み上げる。その後乾杯（親族固めの盃）、祝宴、余興が行われ、最後にしめとして万歳三唱を行う。

料理、花嫁衣裳も婦人会が全て面倒を見てくれたそうだ。料理は経費を安く抑えるためにパターン化したものを婦人会が用意してくれ、また花嫁衣裳も婦人会が貸し出してくれた。

Oさん（66歳、男性、1971（昭和46）年結婚）の事例

Oさんは昭和42年に改築されてからの諸岡公民館で結婚式を行った。

○ 結婚まで

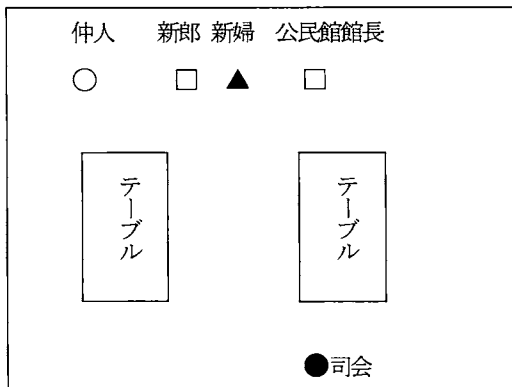
○さんは同じ門前町ではあるが違う地区出身の方と結婚された。この頃になると親が決めた結婚相手と必ず結婚しなければならないという風習は薄れ、当事者同士が承諾しなければ結婚することはなかったという。

○ 嫁とり当日

当日は10時～11時ごろ新婦はお手引きさんと髪結いさんと共に嫁ぎ先の家へ行き、仏壇参りをしに行く。また嫁ぎ先の家に入る際、水合わせも行った。しかしこの頃になると縄はりはまだ廃れてしまいほとんど行われなくなったのだという。またこの時、定かではないが新郎である○さんはすでに公民館にいたそうである。仏壇参りが終わると新婦は公民館へ向かい、親族もおのおの公民館へ集まってくる。

式が始まる前に1階で記念撮影が行われる。そしてそれが終わって12時頃から式が始められる。公民館結婚式での参加者は新郎新婦、仲人、司会（婦人会長）、両家の親族、向い三軒両隣の近所の方々、会社の上司、友人などである。席位置は図2のようにまず新郎新婦が金屏風を背にして上座の中央に座り、仲人、公民館館長がその両脇に座り、司会が下座に座る。あとの参加者は新郎側、新婦側に分かれてテーブルの周りに座る。このとき、親族の血の濃い方から上座に座り、その後は会社の上司、近所の方、友人といった順で座っていく。またこの時は椅子に座っていたそうである。

図2：出席者の席位置



式は司会である婦人会会長によって仕切られる。婦人会会長さんは自身が生活改善運動で公民館結婚式を推進したこともあり、この司会の仕事にとっても責任を持っており、大事な親戚のお葬式があっても司会を優先したという事もあったそうだ。

公民館館長によるあいさつ、三三九度、親子盃が行われた後、指輪交換、友人のスピーチ、新郎新婦による誓いの言葉などが行われる。またその後の余興ではいしばち、踊り、演歌などが披露された。この式、披露宴の間、新郎新婦共にお酒を次いで回るということはせず、ずっと座りっぱなしだったそうだ。

料理は婦人会が手作りで折り詰めを作ってくれる。折り詰めは今で言う少し豪華な弁当といった感じだったそうだ。またそれとは別に鶏汁、刺身なども出された。またこの折り詰めは食べ切れなかったらそのまま持ち帰ったという。

花嫁衣裳は新婦の地元の美容師さんからの貸衣装だったそうだが、式の中でお色直しも行われた。最初は白無垢につのかくし、お色直し後は色の着いた振袖を着られたそうである。

式は午後3時には全て終わっていたそうだ。公民館結婚式では経費節約ということもあり、結婚式の時間自体も短縮された。また片付けは婦人会でやってくれるため、Oさんご夫婦はそれから新婚旅行に出かけられたそうだ。このように婦人会は様々な裏方の仕事をしてくれるが婦人会は言わばボランティアであり、当事者が負担したのは結婚式でいる材料費くらいだったという。

4. 考察

2、3節で黒島、道下における嫁とりの詳細を述べてきた。そこから嫁とりの意義・嫁とり儀式の形式が徐々に変化してきたことがわかる。

まず、黒島のSさんNさん、道下のKさんの事例にもみられるように1950年代～60年代頃嫁とりにおける結婚相手選びは専ら親に一任されていた。これは今のように結婚というものが結婚する当事者である男女の思いが反映されたものではなく、結婚というものが「あの子なら自分の家に来て働き手として頑張ってくれるだろう」、または「あの家に嫁がせれば生活には困らないだろう」といった子を思う親の思いが主に反映されたものだったからである。また結婚を親に決められた当事者も結婚というものはそういうものだど割り切っていたようだ。「嫁をもらうのは働いてもらうため」、「ひどい言い方をすれば道具」、「何もいらぬから体だけきてくれという感じだった」と言っておられる方(80代、男性)もいれば、「誰と結婚したって不満・不足はでてくるもの。誰と結婚したって一緒だ。また今は晩婚化、少子化が騒がれている。そう思うと親の言われるままに結婚したけど、早くに結婚して子供の顔を親に見せることができたし親孝行になったかな」とおっしゃる方(60代、女性)もいた。

また当時の結婚儀礼の様子からもわかる通り、この時代嫁とりに新郎が参加することはなかった。新郎は酒の爛をしていたり(80代、Kさん)違う場所に隠れていた(80代、Tさん)。これについては大部分の方が「なんでだろうね」、「それが普通だった」とおっしゃっていた。こ

の時代において嫁とりというものは今のように「男女が結びつき、夫婦になる儀式」という意味合いはないに等しく、「嫁が〇〇家に働き手として嫁ぐ」という意味合いが強かったようだ。そのため嫁とりは嫁がその家の者として認められる儀式であり、つまり男女両方が主役といった現代の「結婚式」のようなものではなかったのである。当時は嫁に行く女性と、嫁ぎ先の家の方が主役の儀式だったと言えるだろう。

しかし1970年代になるとOさんの事例でも述べたように結婚相手を親が勝手に決めるといったことは少なくなった。またこの年代の結婚式には新郎新婦がそろって出席している。この頃から昔の「嫁とり」というものが現代の「結婚式」というものに近づいていったのではないだろうか。

次に結婚儀礼の形式そのものの変遷という点からも昔の結婚式をみしてみる。1950年代は敗戦直後ということもあり、式自体はいたって質素なものだったといえる。しかし式自体は2、3回に分けて人を呼び、夜中まで宴会が行われるなど、長時間にわたってにぎやかなものだった。またこのときは自宅で式を行うのが主流だった。1960年代になると生活改善運動が行われる。道下では公民館、もしくは自宅での公民館スタイルで行うようになる。この頃から司会、誓いの言葉が式の中で行われるなどの式の中にも変化が見られる。黒島ではまだこの頃は50年代と変わらない儀礼形式だったようだ。しかし1970年代になると道下、黒島ともに公民館でも結婚式が主流となる。この頃になると縄はり、水あわせのような風習は廃れ始めてくる。また現代の結婚式の中でも見られる、祝電披露、友人のスピーチ、指輪交換、お色直し、両親の謝辞といったことが行われるようになる。また式自体の時間も3-4時間となり、昔から見ると大分短縮された。このように結婚儀礼も時を経るごとに徐々に変化してきた。70年代の式の様子は現代の式に随分近づいてきているといえるだろう。80年代になると徐々に式の会場は公民館から金沢のホテルなどに場所を移される。これは一世一代のセレモニーを公民館で行うのはお粗末であるという理由、また婦人会によるボランティアの力の不足などが主な理由だったという。

このように結婚儀礼の形式は変化を遂げた。縄はり、水あわせなどの風習はお金がかかる、手間がかかって面倒といった理由で伝統的な風習は衰退してしまった。その代わりに誓いの言葉、指輪交換、お色直しといったものが式で行われる。昔のように嫁がその家に嫁ぐための儀式ではなく、当事者同士のための結婚式となってきているのがわかる。この頃になると結婚式の意義は現代の結婚式の意義とほぼ変わらなくなってきているのではないか。現代の結婚式は結婚する当事者が自分たちの一生に一度の晴れ舞台を素敵な思い出に残るものにするといった意味合いが強い。つまり自分たちが夫婦になる、その記念すべき儀式なのである。「結婚式」というものに対する意識の変化が、このような昔との結婚式の違いをもたらしたといえるだろう。

式の形態は20-30年で様々な変化をしたようだが、今回調査を行う中でどの年代の方に聞いても必ずおっしゃった事がある。それは「向う三軒両隣は必ず式に呼んだ」ということである。昔

の方々は近所の方々の関係をととても大切にしておられたのだ。これは結婚儀礼が変化していく中で唯一変わらなかったことであつたようだ。今の結婚式で、式に近所の方々を呼ぶというのは珍しいことになつたのではないだろうか。現在の結婚式は親戚、友人、会社関係の人が出席者のほとんどを占める。呼ぶとしても近所の方の優先順位は低いだらう。この要因は一概に何かということは難しいが、昔から見ると近所の方との触れ合いが減つたことが大きいのではないか。昔は近所の人も周りで誰かが結婚すると聞いたら、お嫁さんみたさ、余興見たさなどでその式の日が待ち遠しくてしょうがなかつたそうだ。現代は近所の方との付き合いも減つてしまい、近所関係を大切にしようという意識も薄くなつてきている。そのような点でいうと昔の結婚式というのは式自体は質素ではあるが、近所の方がたくさん集まり、和気藹々とした雰囲気でも盛り上がることができ、近所の方々とのコミュニケーションがはかれる大切な場でもあつたのではないか。

5. おわりに

まず初めに今回の調査にご協力いただいた黒島、道下の皆様に厚くお礼を申しあげたい。調査をしている中で幾度となくこの地域の皆さんの温かさに触れた。見ず知らずの私に御飯をだしてくれる方もいれば、たくさんのお土産をくれる方もいた。また道端ですれ違ふと必ずあいさつをしてくださつた。そして誰もがいつも笑顔で迎え入れてくれた。そんな皆さんの温かく、気さくな人柄に私はとても惹かれた。また何より私は皆さんとお話したその時間がとても楽しく、貴重な時間だつた。今回の調査でこの黒島、道下という土地に来ることができたこと、この地域の皆さんと出会えたことを嬉しく思う。